

# 沿革

## 京急グループの価値創造のあゆみ

京急グループは、1898年に前身である大師電気鉄道としてスタートしました。わずか2キロばかりの路線でしたが、全国で3番目、関東では最初の電気鉄道の開業でした。以降、関東私鉄として初の住宅分譲などに挑戦、交通事業を中心に、不動産、レジャー・サービス、流通事業などを行う都市生活創造企業へと成長し、「都市生活を支える事業を通して、新しい価値を創造し、社会の発展に貢献する」というグループ理念のもと、東京・神奈川を中心に幅広い分野で事業を展開してまいりました。2019年9月には

「京急グループ本社」を沿線を中心とする横浜に開業し、移転後は、横浜を新しい拠点とし、品川や羽田空港が持つポテンシャルと沿線をつなぐ機能を果たしています。

当社グループは、創業来120年以上にわたり、沿線内外の皆さまの生活を支える事業に取り組んでまいりましたが、これからも皆さまに安心してご利用いただけるサービス、住みつけられる沿線を提供し続け、継続的な成長を図りながら、社会の発展に貢献していきます。

### 関東に初めての電車

1899年(明治32年)、資本金9万8000円、立川勇次郎を代表者とし、所有車両5両、営業路線は約2kmの単線で、現在の京浜急行電鉄の前身である大師電気鉄道が六郷橋から大師間で開業しました。関東で初めて、日本で3番目という営業用電車で、開業後、名称を京浜電気鉄道と改め、京浜間全通という大きな目標に向かって歩み始めました。



六郷橋～大師間の桜並木を行く電車

### 住宅地分譲

火力発電所を建設して、自給自足で電車を走らせていた京浜電気鉄道は、余剰電力の供給も行いました。川崎周辺には次第に工場が進出し、京浜工業地帯の基礎が形づくられました。電灯電力供給事業によって、沿線に移住する住民が増え、関東の私鉄では最初の住宅分譲である生妻住宅地の造成・分譲を行いました。



初の分譲住宅地、生妻住宅地の区画図

### 自動車事業スタート

鉄道事業と並行しながら、乗合自動車事業に本格的に参入を始めました。最初に認可が下りたのは、川崎住宅地(現川崎区京町付近)と八丁畷停留所とを結ぶ路線で、6人乗り箱型の自動車が、1927年(昭和2年)から運行を開始。沿線のバス会社を系列化し、積極的に路線を開業していきました。



高輪ビル前の京浜国道を走る乗合バス

### 輸送力増強・設備整備の進展

京浜急行電鉄は、輸送力増強5か年計画に従って、基盤の整備を積極的に促進。学校裏(現平和島駅)、子安、上大岡の3駅に待避設備を設置したのを始め、大師線の電圧統一、信号保安装置の近代化、急緩行列車選別装置の設置、踏切道に自動踏切遮断機の設置、新町検車区の新設などをとおして、本格的なスピードアップ化を目指しました。



新設した待避設備(学校裏駅)

### 沿線開発の本格化

沿線開発を推進して地域社会の発展と、住宅難という社会課題の解決に寄与しようと、1952年(昭和27年)に事業部を設置し、積極的に土地の確保を実施。横浜市南区に花の木分譲地を造成・販売、弘明寺分譲地の販売を行うなどし、以後、鉄道事業・自動車事業とともに不動産事業が大きな柱になっていきます。



上大岡分譲地建売(第2回)

### 都心乗り入れ・三浦海岸駅開業

三崎線が1966年(昭和41年)に三浦海岸駅まで開通し、品川～三浦海岸駅間がわずか70分で結ばれることになり、三浦半島の経済的、社会的状況が一変。三浦海岸線沿いの海岸を「青いデイトナビーチ」と呼称し、海水浴客の誘致を促進しました。また品川～泉岳寺駅間1.2kmの工事が終わり、1968年(昭和43年)、相互乗り入れを開始しました。



津久井浜～三浦海岸駅間開通により海水浴客でにぎわう三浦海岸

### 京急油壺マリンパークの開業

三方を海に囲まれ、気候が温暖な三浦半島は、レジャーを求める人々にとって格好の行楽地であることから、三浦半島開発計画の一環として、1968年(昭和43年)に、大回遊水槽や、魚の習性や感覚を利用してショーを行う実演水槽などを備えた「京急油壺マリンパーク」を開業しました。



「京急油壺マリンパーク」オープン

### 品川開発と本社移転

鉄道では輸送力増強計画が進められるなか、1980年代には、品川地区再開発事業の一翼を担う賃貸ビルが次々完成し、本社も泉岳寺ビルに移転。旧本社ビルは1983年(昭和58年)に京急第1ビルに建て替えられました。同ビルは、事務所ビルやウィング高輪として、本格的な都市型商業施設に生まれ変わりました。



旧本社跡地に京急第1ビルが完成

### 京急百貨店、YRPの開業

横浜市が策定した上大岡駅前の再開発計画に基づき、京急百貨店を1996年(平成8年)にオープン。また、京急百貨店と同時に、より若い年代層を視野に入れ、約80の専門店からなる「ウィング上大岡」もオープンしました。横須賀リサーチパーク(YRP)は、情報通信技術研究の開発拠点として、1997年(平成9年)に竣工しました。



京急百貨店(上大岡駅)

### 羽田空港駅の開業

沖合展開が進む羽田空港へ向かう人々の重要なアクセスとして、1993年(平成5年)に羽田駅(現天空橋駅)が開業。引きつづき、1998年(平成10年)に羽田空港駅(現羽田空港第1・第2ターミナル駅)まで延ばし、羽田空港への直通を果たしました。2004年(平成16年)には、羽田空港第2旅客ターミナルの開業にあわせ改札口を新設するなど、日本の玄関口へのアクセス路線として重要な役割を担っています。



羽田駅出発式



### 「京急グループ本社」への移転

2019年(令和元年)9月に横浜に本社機能を移転し、京急電鉄をはじめとするグループ11社が集まり、約1,200名が勤務しています。1階には、120年の歴史と魅力を伝える場として、「京急ミュージアム」が開業し、みなとみらい地区における子育ての支援施設として、認可保育園「京急キッズランド」を併設しました。地域と調和しにぎわいや交流をもたらす拠点となっています。



羽田空港国際線ターミナル駅開業

### 羽田空港国際線ターミナル駅(現羽田空港第3ターミナル駅)開業、京急蒲田駅付近の高架化工事完成

2010年(平成22年)、羽田空港の再拡張に伴う国際化にあわせ、羽田空港国際線ターミナル駅(現羽田空港第3ターミナル駅)が開業、国際線ターミナルへ京浜急行バスの乗り入れも開始し、京急グループは、世界の玄関口へのアクセス手段として、お客さまにご利用いただいております。また京急蒲田駅付近連続立体交差事業により2012年(平成24年)に上下線の高架化が完了。28か所の踏切が除却され安全性が向上されるとともに、空港アクセスの利便性を向上させました。

### インバウンド施策に尽力し、国内外の人々が集う、豊かな沿線を目指す

訪日外国人旅客への対応として、羽田空港第3ターミナル駅と品川駅において「Keikyu Tourist Information Center(KEIKYU TIC)」を設置。日・英・中・韓の4言語をはじめとした多言語対応可能なコンシェルジュを配置し、「観光案内」「乗車券販売」を中心としたサービスに加え、「手荷物配送」や「MICEサポート業務」など、さまざまなインバウンド施策を実施し、国際的かつ交通の要衝となるまちづくりを進めています。



Keikyu Tourist Information Center

1899

1914

1927

1951

1952

1966

1968

1983

1996

1998

2010

2013

2019~